

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第

卷五十二第

行發日一月二十年二和昭

論叢

社會黨の農民獲得運動

法學博士

河田 嗣郎

租 稅 道 義

法學博士

神戶 正雄

徳川時代に於ける長崎の支那貿易

文學博士

矢野 仁一

スミス「富國民論」の基礎的考察

法學士

石川 興二

文化現象の凝集作用

法學士

恒藤 恭

說苑

我が國の地方費國庫補助制度

經濟學士

中川與之助

雜錄

大名領地について

經濟學博士

本庄榮治郎

獨逸の租稅收入

經濟學博士

沙見 三郎

聚落に關する三新著

經濟學士

黒正 巖

法令

銀行法施行期日ノ件・銀行法ニ依ル地域指定ノ件・銀行法ニ依ル銀行ノ特例ニ關スル件・銀行法ニ依ル人口一萬未滿ノ地ヲ定ムルノ件・銀行法施行細則

附錄

本誌第二十五卷總目錄

見地とであつて、一は大農主義的な見地からして農業社會化を必要と見るものであり、他は小農主義の立場から小農業と小農民との維持せらるべきを信ずる見地である。農民に對する社會黨の態度について考ふるに當つては、先づ大體に於ける兩者の見解の相違を明かにせなければならぬ。

(イ) 大農制支持派の見地

一方の觀る所によれば、經濟進化の根本原則は、工業に對しても農業に對しても大體に於ては同一である。そして無産階級は都會に於けると同様に農村に於ても亦指導的な力であり又組織的な力である。人も知るが如く工業方面に在つては、大規模生産と集中統一との進化法則の行はれて居ることは、最も顯著なことであつて、然かもこの工業大發展の事實と工業上に於ける集中の大傾向とは資本主義の特徴を爲すものである。然るに工業方面に表はれるこの現象は農業方面に於ても亦同様に之を窺ふことが出来る。それは勿論前者に於けるほど著明ではないが、併し常に大體同一様に表現する。即ち生産力と經濟關係との發展、換言すれば經濟生活の單一性は、農業方面に在ても亦大規模生産をして小規模生産を壓倒せしむるに至らしめる。完成せられたる機械は原始的なる勞働を壓倒し、商品交易は自然經濟に取つて代るものである。

1) W. P. Miljutin, Sozialismus und Landwirtschaft, Hamburg 1920, S. 8 fg.

古き社會主義者は多くは大規模生産の優越を信じた。フリーエー Fourier やオウエン Owen の如きユートピアン、ソシアリストも農業に於ける大規模生産と國民經濟の單一性と農工業の結合に關する見地を支持した。フリーエーは個別的なる自家農業組織は農民が極力合理的なる新施設に反抗する状態を馴致するものだとした。降つてルイ、ブラン Louis Blanc やカネー Cabet の如きも農業に於ける大規模生産の優越を信じたのである。

併し農業經濟に於ける進化の理法を一般經濟界の進化の理法の下に理論的に完成したのはやはりマルクス主義者である。その根本見地は大體次のやうである。

農業に於ても亦其の所有の集中の行はれ又大規模生産の發展するは避くべからざる所で、小規模生産は農業に於ても工業に於けると同様に纔かに從屬的な地位を占むるに過ぎず資本制の大生産の下風に立つ外はない。土地の小所有制は社會的にして生産的な労働力と社會的な労働形式と資本の社會的な集中との進化に對して之と兩立し得ないもので、然かも尙ほ大規模なる牧畜や科學の十分なる利用とも兩立し得ないものである。されば農業の近代的發展は大規模生産の爲に科學と技術との十分なる助力を與へ、大規模生産をして種々の關係に於て優越の地位を占めしむるに至つた。

次に商品の交易、金融關係等の方面に就いて見るも、資本制的な發展は、農業にも愈々商的な

要素との接觸を見るに至らしめる。即ち近時の實狀に於ては、中規模の自作農民經濟ですら、市場關係に従屬する所多大であるから、市場と交易と商品生産との關係が益々重要な役目を働くことを無視するやうな議論は誤つて居ると主張せられる。商品交易と商業とが段々農業内に喰入つて行くことは農業の分化を惹き起しその分化は段々に進んで行くものである。

そして更に之を農村の住民に就いて見れば、進化の法則は農村住民をして階級的に分裂するを餘儀なからしめ、農村プロレタリアートと中産的なる自作農民と農村ブルジョアジーとの分離を生ぜしめる。そして農村に於ても亦階級戰爭はそのあらゆる結果と相伴つて發現することゝならざるを得ない。かくて農村に在つても社會的なる轉覆は免れざる所となり、封建の遺物即ち地方貴族的な所有制は撲滅せられ、農業の地盤の上に於ける新形式は化成せられ、農村無産者と半無産者との組織は行はれる。

農村に於ては事情の進化が遅れては居るが、それでも結局は工業の経過せると同じ道を辿つて進み、同一様の結果に到達するものである。即ち社會革命に際しては、無産階級の獨裁が都市に於ても農村に於ても同一様に組織的にして又促進的な力を形成するものである。

右のマルクス主義者の見地は一般的にはマルクス²⁾及エンゲルスに依て示されたものであることは言ふ迄らないが、これを農村及農業について特に明確に言表したのはカウツキー³⁾ Kautskyで

- 2) K. Marx, Das Kapital, I, Bd. S. 444 fg. (Volksausgabe) — 拙稿「マルクスの農業經濟觀」(本誌第二十四卷 第六號) 參照
3) K. Kautsky, Die Agrarfrage, Stuttgart 1899; ditto, Die Sozialisierung der Landwirtschaft, Berlin 1919 參照

ある。

その見地よりすれば、資本的なる大規模生産の壓倒的な優秀力に對して小農民制を維持せんことは到底望なき所である。かるが故に古き社會主義者等は、社會主義が實勢力として天下を支配するに至る以前に於て自作的小農民の大部分は夙に没落して消滅に歸し、其所有地は大所有者の手中に兼併せられるであらう。そして農業生産は大部分既に大規模經營者の手に集中されて行はれることになつて居るであらう。されば社會主義としては、たゞ大地主の手中に集められたる所有地を國有に化し、其經營する農業をも取上げてこれを共同的な耕作經營に移すだけの任務を有するに過ぎぬであらうと信じた。

斯く信するが故にこの派の社會主義者の多くの者は自作的なる小農地をば其の所有者の手中から沒收することは社會主義の任務に屬するものとは見なかつたのである。社會主義が手を下す迄もなく、社會主義が政治の實權を握る以前に於て自作農地の大部分は大地主に依て兼併せられ、自作農民の大部分は既に没落してしまふ筈なれば、社會主義としてはたゞ斯く集められたる大農所有地を國有化するだけのことを爲せばよいと考へたのである。そして社會主義が實權を握る曉に於ても尙ほ殘存する自作小農民ありとせば、彼等に對しては社會主義は其小所有地を沒收する必要もなく又沒收してもならぬと考へた。エンゲルスの言ふ所によるも、代償を拂ふと拂はざる

とに區別なく、小農民の所有地を権力で剝奪せうなど、考へてはならぬ。此點は大農所有地に對すると大いに異なる。小所有農民に對する社會主義の任務は先づ彼等の所有地と自作經營とをば組合的な共同利用と共同經營とに移さしめることに存する。然かもそれは力で強制的に行はしめるのではなく、實例を示し又社會的なる援助を與へることに依て、誘致するのではなくてはならぬとせられて居る。⁴⁾

カウツキの言ふ所によるも亦社會主義が自作農民を其所有地から驅逐するなどいふことはあり得ないことだとせられる。そんなことは狂氣に近いことで、反對派の惡宣傳に過ぎない。眞面目な社會主義者にして自作農民の所有地を沒收せなければならぬなど考へて見たものも無いと言つて居る。⁵⁾

これによつて見れば、この一派の社會主義者の見る所は、之を要約すれば、たゞこういふことになる。即ち工業に於けると同様に農業に於ても亦大規模生産が小規模生産に優りこれに打勝つことは如何ともすべからざる不可避のことである。そして社會主義が實權を握る以前に早くも資本制經濟の内部に於て資本主義的なる大生産が自作的小農業の犠牲に於て増加して行き擴がつて行くであらう。そして社會主義としては實權を得たる後に殘存する自作的小農民はこれを導いて漸次社會主義化するには努めねばならぬが、その所有地を取上げて之を押潰す必要もなければ意

- 4) Fr. Engeles, Die Bauernfrage in Frankreich und Deutschland (Die Neue Zeit, XIII. 11. S. 301)
- 5) K. Kautsky, Die Agrarfrage S. 442f.; do. Am Tage nach der sozialen Revolution, Berlin 1902, II. S. 33.

思もないといふことである。

この一派の對農業及對農民見地は、大體に於て舊派の見地として知られて居る所である。然るにこの一派の見地に對して全然異なる立場を示して居る社會主義者の他の一派は、小農民主義を掲げるものであつて、それは勿論現時の資本主義とは相容れないものだが、生産手段の所有に關してはその私有制を認め自作的小農地の所有の基礎の上に小農業の維持を圖らんとするものである。この見地は種々の人々に依て種々の機會に公にせられ、かなり早くから上掲の見地に對する反對勢力として表はれて居たが、近時特に戰後の改造期に當つて傳播した觀がある。

(口) 小農制支持派の見地

第二派の見る所によれば、農業及農村關係に於ける進化の状態は、工業方面に於ける進化とは全然異なるものである。工業に於けることは反對に農業に於ける進化は小規模生産を基礎とするものだとせられる。

英國のチャーチストも既に小農主義の見地に立つて居たが、佛蘭西のブルードン及其一派も亦小農主義を支持する所があつた。併し最も熱心に此の見地を主張したものは十九世紀の末葉に表はれたる小市民的社會主義者若くは改良的社會主義者といはれる人々である。その一派を代表す

6) Miljutin, a. a. O. S. 12 fg.

る最も著明なるものとしてダヴィッドを擧げねばならぬ。彼は小規模農業の長所をば生産の立場より説明し、小規模農業は集約的なる土地利用に關しては最も合理的なる生産に對する最も都合よき前提を爲すものだと主張した。⁷⁾そして此派の見地は社會に於ける中間階級たる小市民階級の小市民的所有利益を代表し代言するものだとせられて居る。近時に於ては露西亞のチャヤノフの如きに依て爲されて居る所の自家的小農經濟に關する議論なども、此派の一分岐を爲すものと見られ、その議論は自作農民階級の間に於ける眞剣な傾向を反映するものたるを失はない。その立場は實に農村産業組合運動の支柱を爲す次第である。

此派の議論の出發點を爲すものは個々の小農的經濟であつて、それは農業の進化に對する好良の地盤を爲すものと信せられて居る。そして農民産業組合は個々の農民經濟に對して技術と生産物の組織的なる販賣と、信用授受とに關するあらゆる利便を與ふる可能性を具備せるものとせられる。チャヤノフの言ふ所によれば、小農民經濟は露西亞將來の經濟的秩序の基礎とせられねばならぬが、然しそれはその本質上從來の資本制的に組織せられたる經濟とは異なるものとせられるのである。

農業の目的は個々の農民經濟の爲に最大の収益を齎すことに在る。

この基礎の上に此一派の經濟政策は築かれるのであつて、その經濟政策は小所有者の利害をば

7) E. David, Sozialismus und Landwirtschaft, Berlin 1903.—拙稿「農業と社會主義」(中央公論第四六四號所載) 參照

8) Al. Tschajanow, Die Lehre von der bäuerlichen Wirtschaft (Versuch einer Theorie der Familienwirtschaft im Landbau, Berlin 1923.

一般的なる經濟過程から解き放ちこれを獨立のものとして表現せしめんとすることに其任務を限定する限りに於ては、市民的なる經濟秩序の埒内に於ても、又社會主義的なる秩序の埒内に於ても共に事情に適合することの出来るものである。現在のやうに小所有者の存在して居る時に當つての政策として實地施設上に於ける此派の主張の強味は或程度までは實に茲に存する次第である。然し國民經濟の單一性だとか、農業と工業との融合だとか、勞働の社會的なる大量的組織だとかいふことになれば、此派の主張は一向縁故なきものである。

とにかく先に述べたる所謂舊派の社會主義者の主張に對して、此派の主張の異なる最も重要な點は、小自作農地に對しては、その所有權を認め、その私有制を維持して、その上に行はれる小規模農業をも維持せんとするばかりでなく、寧ろこれを以て農業組織の基礎とせんとする所に存する。蓋しそれは農業に於ける大規模經營と小規模經營との優劣に關する意見の根本的相違から生ずる所たるに外ならない。そして此點に關しては近時一般に新派の社會主義の見地と認められて居るものは、皆何れも小農主義支持の立場に在ることに於て其軌を一にして居る。

所謂新派の社會主義の見地よりすれば、自作農民は資本制の經濟社會に於てすらも大農經營から壓倒せられはしない。されば舊派の社會主義者の豫期する所とは異り、社會主義が天下を取る時期に至つても、耕地や牧場の大部分は依然として小農地所有者の手中に存するであらう。そし

て社會主義は大工業と鑛業と大農地と大商業と銀行との如きはこれを社會化し能ふし又社會化せねばならぬが、自己の所有地の上に自ら經濟を營む數百萬の小農地所有者の所有地に手をつけやうとするものではない。社會主義はたゞ既に資本制的發展が大資本主と大地主との手中に集中せしめたる生産手段をのみ徵收しこれを社會の公有に移し得るに過ぎない。自作的小農は封建時代に於ても存在し、また資本制社會に於てもよく其存在を保ち得たやうに、社會主義經濟の下に於ても其存在を持續すべきである。

自作的農業は、それ自身としては資本制的な生産形式でもなければ、又社會主義的な生産形式でもない。然るにも拘らずそれは資本制社會に於ても壓倒せられることがなかつた。たゞそれは資本制社會の環境に適合せなければならなかつた。それと同様にそれは又社會主義的社會に於ても亡滅することはないが、たゞ社會主義的なる環境に對しては適合を圖らなければならぬ。

資本主義は當初一七八九年や一八四八年のやうな市民的な革命に依つて所有權沒收の働を爲し土地大所有者から種々の特權を剝奪したが、此の革命的な沒收に次ぐに平和的なる組織の行はれる幾十年を以てし、其期間に於て小農民は徐々に新たな環境に適合することが出來た。即ち自給經濟から商品生産の經濟に移り、自然經濟から貨幣經濟に移り得た。自己の經濟を漸次改造することに依て資本制の經濟環境によく適合することが出來たのである。これと全く同じやうに社

會主義經濟に於ける小農民の適合作用も行はれるであらう。社會主義實現の曉にはやはり所有權沒收のことが行はれるだらうが、それはたゞ既述のやうに大所有に限られたことである。そして其革命期に次いで表はれるものは又幾十年の平和な建設の時期であらねばならぬ。其間に在つて小自作農民は必ずやよく新環境に適合すべきである。

彼等は先づ大所有地の國有化せられることによつて現在の資本的なる搾取から解放せられる。そして大工業と大商業とが社會化せられることになれば、それと共に小農民の社會的勞働所得に對する割前は、現在のやうに力の支配關係に依て支配せられることなく、社會の手に依つて意識的に調劑せられることになる。此の道に於ては實に農業は社會化せられることになるのだが、それは決して小農地の沒收に依て爲されるのではない。

斯くて農民は社會主義制の下に於ても、其の獨立なる自家農業を特續するを得るのだが、然かも社會主義は資本主義の營利一點張りな業務方針に代へるに、社會的共同奉仕の精神を以てするから、産業組合運動の如きは大いに促進せられることになる。そして産業組合が發達することになれば農民はその團結の下に於て大規模生産に伴ふ技術上と經營上との利便を十分に享受することを得ると同時に、科學の進歩に伴ふ幾多の恩恵にも十分に浴するを得る次第で、社會主義は此事の爲めに十分なる注意と努力とを拂はんとするものである。

要するに斯くの如きが舊派の見解と主張とに對する新派の見解と主張とである。何れを舊派といひ何れを新派といふべきかについては、多く拘泥する必要がないが、兎に角社會主義者の間に農業に對する見地と農民特に小自作農民に對する見解とに、斯くの如き相容れざる相違の存することは、見遁してならぬ所である。此の兩見地を腦底に置き乍ら以下先づ少しく、獨逸其他の社會民主黨の對農業策と農民獲得運動とについて、實地の經過を観察してみやう。

二 國際勞働協會の農政見地

獨逸に於ける社會主義者の實際運動は、一八四八年の革命に依て刺戟されてより勞働運動として其氣運が動いて、一八六三年ラサール Ferdinand Lassalle に依て實際運動の目鼻がつけられるに至つた。併しラサール及其後繼者たるシュワイツァー J. B. von Schweizer に依て爲された運動は純粹な勞働運動であつて、それは社會主義的ではあつたけれども、マルクス主義の立場に據つたものではなかつた。そして其運動に於ては何等農業に關する問題が取扱はれることはなかつた。ラサール等には農民を以て其運動を共にすべき同行と見るやうな考は全くなく、農民は都市の無産者と政治的に共同運動を爲すに足るものとは見られて居なかつたのである。

次に表はれた獨逸の社會運動はリープクネヒト Wilhelm Liebknecht 及シーマン August Bebel

に依て導かれたのだが、之れはマルクス主義に據れるもので國際労働協會 die Internationale Arbeiterassoziation¹¹⁾ は其運動の本陣であつた。そしてこの國際労働協會に於ては農政問題に對する態度の明かにせられたことが、特筆に値する所で、爾來今日に至るまで獨逸の社會民主黨の農業政策は大體に於てこの國際労働協會に依て定められたるものに外ならぬ。國際労働協會は一八六四年に設立せられたのだが、其目的は労働階級の解放を實現するに在つた。そしてその提示した政策は労働政策であつて廣く社會主義的なる一般政策ではなかつたから、農政問題の如きは元より其本來の運動の行はるべき域外に存し、農村の住民はやはり其眼中にはなかつたのである。たゞ事情の進化に伴ひ此問題に關しても其態度を定めなければならなかつただけのことである。

純粹な労働者問題に關しても一方ブルードン主義に據て立てる佛蘭西の社會主義者と他方英國の労働組合主義者及び獨逸のマルキシストとの間には、著しい意見の相違があつたが、農政問題に關してはブルードン主義者とマルクス主義者との間には最も明白な隔離があつて、兩者を連結することは難事中の難事であつた。一と度問題が此方面に觸れると兩者は到底手を携へて進み得ないで、互に接近せんと努むれば努むるほど益々遠く隔つて行く結果に陥つてしまつた。

社會黨の國際協議會は一八六六年に初めてゼネバに開かれたが、農政問題が初めて舞臺に上げられたのは其翌年催されたるローザンヌの協議會の折であつた。此會合に於て白耳義の César de

11) Ed. David, Sozialismus und Landwirtschaft, Berlin 1903, S. 21 W.

Cohnstaed, Die Agrarfrage in der deutschen Sozialdemokratie, München 1904, S. 80 fg.

Paape なる者土地の國有制を提議し、英獨の代表者等が之を支持した。然るに佛蘭西のブルドニストは熱心に之に反對し、私有制を以て個人自由の爲めに缺ぐべからざる條件を爲すものとした。かくて問題は決議せられず、翌年に持越すことになつた。

次にブリュッセル¹²⁾に開かれた協議會に於てはマルキシストは遙かに多數を制し、de Paape の提案は多數を以て採決せられ、農地と森林とは左の理由を以て國有とせらるべきものと定められた。

一、生産上の要求と農學上の諸法則の適用とは大規模農業を必要とし、機械力の使用と農業労働力の組織とを必要と爲すが故に。そして又一般的に現代の經濟的進化は大規模農業に向ふものなるが故に

二、右の理由により農業労働と農地所有とは鑛業に於けると同一地歩の上に置かれねばならぬが故に

三、土地の生産的能力はあらゆる生産物の原料を供し、あらゆる生産手段とあらゆる有用物の源を爲すものなるが故に。そして此の生産的本性は元來労働に依り造り出されたるものならざるが故に

此等の諸理由により協議會は、現代社會の經濟的進化が土地を社會の公有に移し、土地は之を

12) David, a. a. O. S. 21ff.;
Cohnstaed, a. a. O. S. 82fg.

國家から農業生産組合の手に小作に附することを以て社會的の必然性たらしむるものと信ずると決議せられたのである。

森林については

一、森林を私人の所有に委かせて置いては其荒廢を齎すが故に

二、この荒廢は水源の制理と維持とに影響し土地の収益能力を減し、更には一般の保健状態を危くし市民の生存を傷くるものなるが故に

協議會は森林を以て社會の公有とせざるべからざるものなることを聲明するとせられた。

この決議の示す所が農地に關しては飽迄マルクス主義的なることは容易に認め得られる。即ち農業も亦他の産業と同様なる進化の道程を取て進むもので、小規模生産より大規模生産に向つて進化するものだといふ見地が示されて居る。

其後一八六八年に至り *Eccarius* なる者¹³⁾が、ジョン・スチュアート・ミルの學說に對する反對意見書を公にした。其中に小農業に關する一節が含まれて居るが、それは社會黨員の間には大いなる勢力をかち得、其後久しき間獨逸の社會黨員の農業に對する見地は、之に依つて支配せられたる觀あり、後に述ぶるリーブクネホトの文章と共に、其意味に於て特筆に値するものである。其の一節に依れば農民階級は没落に瀕せるものなることが論示せられ、大規模生産は隨所に勝利を

13) Cohnstaed, a. a. O. S. 85 fg.

占むべきものと見られ、小規模なる自作農業が現代の大農業に對して有する關係は、恰も昔の手で紡ぎ手機で織る仕事が現代の機械紡績や機械織布に對して有する關係と同一様であるにせられた。従て結論としては、小規模なる自作農業は過去の農業に過ぎざるは自明のことたらざるを得ないわけである。

彼の見る所によれば、小規模なる獨立労働をする農民と大規模なる資本的小作人との間に存する本質的な相違點は、前者の業務の目的は自家の必要を充す爲めに生活資料の生産を爲すに在るに反して、後者の主業務は他人の需要を充すことに在るとせられる。そして工事に従事する人々は生活資料を買はなければならぬが、小農民からは何物をも買ふことは出来ない、たゞ大規模な小作人からのみ之を買取ることが出来る。されば結局小農經濟は工業的國家と兩立しないものである。然かも小農民は其の境遇に於ては寔に憐むべきもので、人間以上の苦痛多き労働に従事し乍ら其生活は實に人間以下の生活である。

斯くの如く見る所から *Eccarius* は次の結論に到達した。曰く集中せられたる資本と結合せられたる労働とが、手工業的な經營に於ける分散せる労働を壓倒して之に打勝つたやうに、結局は共同的な組合的な生産が資本制的な生産を壓倒するであらう。

然るに賃傭労働者は既にかゝる共同的な働に慣れて居るけれども小農民はこれに適せない。さ

ればミルの言ふやうに勞働者を再び自作農民にすべきではなく、總べての未墾の土地と公有地と、總べての王領地と寺領地とを農業共同組合に交付すべきである。然かもそれは永久的な所有地としてではなく、小作契約の下に交付すべきであると。

次に一八六九年に國際勞働協會の代表者等はバーゼルに集會¹⁴⁾を催したが、この協議會は農政問題に對する國際勞働協會の態度を示すことに關しては、從來の何れの集會よりも意味深きものであつた。それは其の決議の内容に於て然りしよりも外部に對する影響に於てさうであつた。此の協議會に於ては又 de Pege の提案にかゝるブリュッセル會議の決議事項が問題にせられたのだが、問題は委員會に附托せられ、委員會は土地に對する私的所有制を廢止することは法律上許さるべきことで又必要なことだといふ意見に一致した。將來の農業經營を如何にすべきかについては意見の一致を見るを得なかつた。多數派の意見では曩のブリュッセルの決議以上に出で共同的組合の小作に委ねるのでなく公共團體自身が農業を經營すべきだとした。その理由は共同組合に小作さす分では地代の發生といふ現象を除去することも出來ず、又結局は小作が化して私有制となる恐があるからといふことであつた。然るに少數派の見所は、前年の決議よりも更に一步を退き、社會は土地をば個々の農民若くは農業共同團體に地代を支拂はしめて交付すべきものだとした。

14) David, a. a. O. S. 24
Cohnstaed., a. a. O. S. 87 fg.

協議會の決議としては、社會は土地の私有制度を廢止しこれを共同所有に變ずる權能を有すること、かゝる改革は必然的なものだを見ることを聲明することになつた。そして協議會はこの共同所有制の原則を承認するものなるが故に、各分會に對してこの共同所有制を實現すべき適當な實際手段を講究すべきことを希望する旨を併せ決議した。

其後二年にして又倫敦に協議會が開かれたが、此度は土地の所有制や農業經營方法に關して議論を戦はすことなく、農民をして工業無産者の運動に結合せしむべき適當の手段に關する調査を遂げこれを次回の會合に於て報告すべき旨を國際労働協會に委託することにした。此事は社會黨の農民獲得運動を講究するに就いては大に注目すべき所たるを失はない。蓋し從來は主として社會黨としての農政見地を確定することに力が注がれたのに、今やそのことよりも進んで農民と産業無産階級との共同運動を實現せん爲めに、換言すれば社會黨が農民を獲得して自己の共同戦線内の人たらしめんが爲めに、其手段方法を講ずるといふ所まで進んで來たからである。そして農民を獲得するといふことを本位にして物を觀る場合には、農政に對する根本見地も場合に依つてはこれを變更する必要が生じるだらうし、少くとも之を緩和する必要が生じるかも知れぬといふことは豫想しなければならぬ所だからである。ともかく此協議會に於ては農政に關する理論上の討論を止めて、農民自身に向つて働きかけることにした點が一新傾向を示すものと見られねば

ならぬ。そしてそれは曩にブラッセルの會合の際代表者の或者が、農業問題に關する終局的な決定を爲すことは農民自身がこの協議會に代表者を送るやうになる迄待たなければならぬと進言した所に基く次第で、大いに注目し値する。

猶ほ注意すべきことは、ブリュッセルの大會以來獨逸の社會主義者の人々の見る所と、佛蘭西の社會主義者の見る所とが相反して居ることである。これは當時兩國の實際の事情の相違に因る所多大なりとせなければならぬ。當時獨逸は既に大いに工業國化せんとする傾向が進んで居て、工業労働者のみを結合することに依ても大いなる勢力を得る見込があり、議會に於て多くの議席を占める見込もあつたから、其社會主義運動は主として工業労働運動として行はれ、工業労働者を以て成れる無産階級の方が最も重きを爲し、從て其運動の進路もマルクス主義に依て導かれるを適當とした。然るに佛蘭西は當時まだ工業的な發達が十分でなくて、農業國たる面目を多分に備へて居たのだから、同じ社會主義でも其の運動が實際勢力を占めんためには工業上の賃借労働者以外にどうしても農業者を度外視することが出来なかつた。農業労働者と併せて自作小作等の小農民を捕へて離さないやうにすることは、社會主義者に取つては運動の實際上是非必要なことであつた。然かも同國には小さな自作農民や分益小作人其他の小さな小作人が農民中の大部分を占めて居り、その小自作農民の心を得ると否とは、社會主義運動上の實勢力の消長には大いに影

響する所なきを得なかつたのである。されば同國の社會主義者はブルードニズムに據り、ブラッセル大會の決議に對しても反對の票を投せざるを得なかつた。其後佛蘭西にもマルクス主義は浸漸したけれど、眞のマルキシズムは同國ではどかく十分なる成育を遂げ難き有様であつた。

そこで又進んで事實の經過を窺ふに、獨逸に於ける社會主義的傾向は、その間に大いなる發展を遂げアイゼナツハの大會に於ては社會民主的勞働黨が組織せられるに至つた。そして其會合の際農民に對する宣言書の作製せらるべき決議の爲されたことは、注意を要する所である。その決議に基いて Becker (in Genf) や Oberwinder (in Wien) や Liebknecht (in Leipzig) 等に依つて宣言書は作られることになり、ベツカー之を作製したが、それは時の獨逸の實狀に合致しないものと見られ、社會民主黨からは發表せられなかつたが、バーゼル會合の行はれた數ヶ月の後國際勞働協會の獨逸中央委員會に依て發表せられた。

このゼネヴァの宣言書¹⁵⁾なるものは農村に於けるあらゆる勤勞者に呼かけられたものであつて、其文言によれば、諸君は小所有者であらうと自作的な獨立勞働者であらうと又は他人に雇はれたる賃儲勞働者であらうと、諸君は皆一樣に大地主制と資本との役獸たるに過ぎない。然かも牧場や厩舎に在る他の役畜よりも保護せられたることの薄く又養はれることの少きものであるといふ風に書かれてあつた。そして同宣言書は統計的な數字を掲げて農民が到る所に於て没落に瀕して

15) David, a. a. O. S. 24—28 捕稿「農業社會化運動」(改造第八卷第七號所載)
Cohnstaed, a. a. O. S. 93 fg.

居ることを示し、轉じて資本的なる大規模經營の優越を述べ、小農民的な經營は資本の全能的な力と科學の影響と事實の經過と社會全般の利益との爲めに、取返しのつかぬやうに何の憐みもなく漸次的な死滅の宣告を與へられて居るものとした。されば今若し農民諸君にして總べての者の福祉の爲めに任意的に自ら進んで所有を投げ出すであらうならば、それは最上々のことであると告げた。そして最後に農民は自由なる國民的國家を建設せんためにあらゆる國々の都市の勞働者と結合すべきことを勧めたのである。

この宣言書はマルクス主義的な見地から農業に對する態度を宣明したものである。これは實に典型的なものを見てよいであらう。それは小農民的な經濟を半ば沒落せるものと宣告することに於て典型的であるし、また其沒落の實狀を數字の上で實證せんとしたことも特色を示すものであつた。そして特に最も面白いのは宣言書が小所有農民に萬人の利益の爲に自發的に其所有地を抛げ出さんことを勧告せる點である。當時の社會主義者達が如何に農民問題に對して單純な考を持って居たかよく窺はれる。恐らくは彼等が農業及農民なるものに對して有つて居た智識はマルクス資本論の第一巻とエツカリウスの小冊子との外に出でなかつたらうと言はれて居る。

この宣言は瑞西で出されたけれども、實は獨逸の農民特に西南部地方の小農民に向つて發せられたものなるは言ふまでもない。そして其の結果は想像に難からざる所である。即ち斯かる宣言

は、農民を獲得せんが爲には妨にこそなれ決して農民の心を捕ふる所以でない。農民に取つては土地の所有を獲んこと、之を失はざらんこと、は、最も大事な問題であつて、謂はゞ其逆鱗である。社會黨にして苟もこれに觸るれば農民の怒を買はないでは止まれないのは明かな事實である。されば社會黨の農政方針として飽迄あらゆる土地の私有制を廢止せんとならば、其政綱を掲げるは固より差支ないことだが、その實現の爲には小農民を敵にまはしても之を押し切つて力で以て實行する覺悟がなくてはならぬ。然るに今あらゆる農地の國有制を標榜し乍ら然かも理を説いて小農民に自發的なる所有地拋棄を勧めるといふは、農民を理解せざるの甚しきものと謂はねばならぬ。さればこそ社會主義者中のマルキシストとして其代表的の見地を執つて居る者でも、少しく農民の實狀と其心理とを理解して居る者は、前にも示したやうに、國有にするは大農地だけであつて、自作的な小農地は其私有制を認めて之れを維持し、たゞ其上に行はれる農業經營をば共同組合化せんとするに過ぎないのである。この情理からして之をみれば、所謂ゼネヴアの宣言書なるものが大きな見當違を演じたといはれるは、致方の無い所であらう。(未完)